清楚な彼女の堕とし方

18

18歳未満の
閲覧・購入禁止

illustrator：はべりん

基本CG枚数：11枚

彼女…伊吹と共に執務に励むようになり
いくつもの月日が流れた。

忙しい時にも文句ひとつ言わずについてきてくれる、
そんな彼女は心の支えにもなっていた。

しかしこれだけの時間を共にしても
私たちの関係は上司と部下以上には発展しなかった。

私とて一人の男子である。
これだけの美少女と空間を共にする以上、
常日頃、期待が高まっていくというものであった。

「主殿、こちら確認お願いいたします」
「ああ、あとで見る、置いておいてくれ」
伊吹から書類を受け取る。
何気ない仕草のなかで揺れる胸、
美しい髪の隙間や大胆な露出の衣装からみえる背中、
意識していなくてもこみあげてくるものがある。
「ああ――伊吹とえっちなことしたいなあ……」

伊吹が見てはいけないものを見たような表情になる。

「えっと……その……。」

……疲れからか、つい口に出してしまっていたようだ。

気まずい空気になる。

「あー……なんだ、忘れてくれると助かるんだが……。」

驚いたような表情で固まっている伊吹。

これはしまったな……。

「あ、あの……。」

沈黙を破ったのは伊吹のほうからであった。

「今夜、主殿の寝室へお邪魔してもよろしいでしょうか。」

伊吹の言葉に思わずゴクリと喉が鳴る。

こんなに都合のいいことがあっていいのだろうか？

「あ、ああ……。」

少し戸惑いながらも大きすぎる期待に負けて了承してしまう。

その後の業務はお互い無言でこなすこととなってしまった。
セクハラまがいの言葉を受けた後だ、当然と言えば当然であろう。
しかしこの夜、私は伊吹の驚くべき献身を受けることとなる。

夜の寝室にて広がっていた光景は
思わず黙り込んでしまうような、信じられないものだった。
何も身にまとわない状態の伊吹が目の前にいる。
その表情は少し物憂げで、切ないようにもみえた。

「失礼いたします…。」
丁寧な手つきで下半身を露出させられる。
期待に膨らんだモノは恐ろしいほどに硬くなっていた。
伊吹は少し驚いたような仕草をしたが、
すぐさまちんぽへ顔を近づけた。

ぬるっとした感触が走る。
伊吹が顔ごと動かしながらちんぽの上下を満遍なく舐めあげている。
既に我慢汁があふれ、唾液と混ざり合って汁まみれになったちんぽ。
その硬さと大きさはこれまで以上に凄みを増していく。
んむっ♡
れろっ♡
ちゅっ♡

「主殿……、いかがでしょうか？」

「あ、ああ……すごくいいぞ。」

まだ戸惑いも大きいが、伊吹の奉仕は視覚的にも触覚的にも最高であった。

「……♪」

自信がでたのか、動きがさらに強くなる。

既にかなりの快感を得ていたが、動きが強くなったことでさらに興奮が高まる。

早くも限界が近づいていた。

「伊吹…っ、すまない、そろそろ……。」

悶える私の様子を見て、伊吹はさらに動きを激しくした。

びゅく♡
びゅる♡
どぷ♡
ぶびゅー♡

「す、すまない、思わず出てしまった。」
思わず、というのは本当だ。
膝が少しガクガクと震えるほどの快感だった。
『んっ……、ちゃんとできたみたいでよかったです……。』
これで終わりかと思いきや、伊吹はまだちんぽを舐め続けている。
精液が後から後から込み上げてくるように溢れ出す。
ゾクッ♥
ゾクッ♥
れろ♥
ぢゅっ♥

吸いつくようにしゃぶりついてくる伊吹。
出したばかりなのに衰えるどころか、硬さは増す一方だ。
ちゅーっ♡

愛おしそうにちんぽにロづけを繰り返す伊吹。
その健気にもいやらしくも見える姿に、
私は次なる欲求を抱いてしまう。
ちゅっ♥
ちゅっ♥
ちゅる♥

たまらず伊吹を押し倒す。
抵抗される様子はなかった。
「いいか？伊吹。」
ガチガチに硬くなったちんぽを擦りつける。
もはやダメと言われても止まれそうにない。
「は、はいっ……。」
伊吹の声、それから表情からも緊張が伝わってくる。
その様子をみて、これから彼女を抱くという実感がわき、
ますます興奮してしまう。

「あんっ……。」
伊吹の中に硬くなったちんぽを突き立てる。
柔らかいながらに強い締め付けのそれは、
入れた瞬間から快感をもたらした。
「う、動くぞ。」
あまり気を遣ってやれそうにない。
私は欲望の赴くままに腰を動かし始めた。
ずぷっ

「あっ…んふぁ…っ、んんっ…。」
突くたびこぼれる官能的な喘ぎ声。
もっと聞きたいという気持ちから行為は激しさを増す。
獣のように息を荒げて腰を打ち付ける。
膣内は十分に濡れていたが伊吹は少し苦しそうだった。
しかしながら止まれそうにない。
私はこのまま射精まで一気にスパートをかけることにした。
じゅぷっ♥
ぬぷっ♥
あっ♥
んっ♥

『～～～～～～っっ～』
叩きつけるような勢いの射精とともに伊吹の身体が震える。
跳ねとんだ精液は伊吹の胸元あたりまで汚した。
精液によって汚される伊吹の白く美しい肉体は
ひどく官能的に見えた。
びくっ
びくっ
どぷっ
ぶびゅ～っ

ちんぽを抜くと収まりきらなかった精液が溢れてくる。
はー！
はー！
精液まみれになり、肩で息をしている伊吹を眺めながら、
我ながら随分と出したものだと思った。
どろぉ～

「はぁ…はぁ…、主殿…いかがでしたでしょうか……？」
行為の感想を健気に訊ねてくる伊吹。
その姿が煽情的で、私の興奮は未だに衰える気配がない。
はぁ！
はぁ！
「あ、主殿……？」
黙り込んで伊吹を見つめていると心配そうに声を掛けられる。
「すまない。伊吹。まだ私は満足しきっていないようだ。」

伊吹を四つん這いの状態にさせる。
肘をついた状態でふせているのに、
おっぱいがシーツについているのが
なんとも魅力的な光景だった。
「この格好は…少し恥ずかしいです。」

何を今更、と言わんばかりに
ちんぽが怒張する。
もっともっと伊吹を味わいたくて
仕方ないのだ。
了承を得る前に伊吹を犯すべく
ちんぽをまんこに当てがわれたのだ。

「あっ、主殿……っ。」
何か言いたげな伊吹、
しかしもう止まれないのだ。
二度目のまんこの感触。
心なしか先ほどより熱さとぬめりを感じる。
何度しても飽きがこなさそうな身体だ。
早速動き始める。
ずぷっ♥
あっ♥

無遠慮に腰をたたきつける。
貪るように動くたびに尻肉が揺れた。
すっかり慣れてきた膣内は十分な湿り気を帯び、
激しく突くとその分だけ伊吹の肉体を味わえた。
ばちゅっ♥
ばちゅっ♥
じゅぷっ♥
びくっ♥
はっ♥
はっ♥

より強い快感がほしくて腰を振りたくる。
いじらしく耐える伊吹の姿は興奮を促し、
背徳感と射精感がこみ上げてくる。
「主殿っ…も、もう……っ。」
「……っ！」
伊吹から限界を訴える声が上がると同時に、
こちらも一気に耐えられなくなる。
ばちゅっ♥
ばちゅっ♥
じゅぷっ♥
ビクッ♥
はっ♥
はっ♥

震える伊吹の中に思いっきり射精する。
勢い余って、出すそばから精液が溢れてくる。
ビクッ♥
ふぅ♥
ふぅ♥
びゅくんっ♥
びゅるるっ♥

未だ興奮冷めやらぬまま
硬いままのちんぽを引き抜く。
激しくしすぎていじめたような背徳感があったため、
少し冷静になると嫌われていないか心配になってしまう。
現に伊吹はかなり疲れた様子であった。
ズロ…♥
はぁ～っ♥
はぁ～っ♥

「すまない、少しやり過ぎた……。」
散々やりたい放題しておきながら
今更ながら心配するような意志表示をする。
「いえ……、主殿に求められて伊吹も嬉しいです……。」
こんなにしても伊吹はいじらしく健気に接してくる。
まずいな……、こんな態度をとられたのでは
また伊吹に甘えてしまいそうだ。
ドロ…♥
はぁ～っ♥
はぁ～っ♥

翌日。
調子に乗った私は執務時間中に伊吹に奉仕を要求した。
半分冗談ではあったが、彼女は嬉しそうな表情で快諾。
そういえば昨晩も無茶苦茶にやったのに、
最後には笑みを浮かべていたような覚えがある。
もしかしたら伊吹には
そういった才能のようなものがあるのかもしれない……。

「主殿、お加減いかがでしょうか？」
日ごろから目にしていていつかやってみたいと思っていたことだ。
伊吹の服のズリ穴にちんぽを突っ込んで胸で挟ませている。
やわらかなおっぱいの感触と人肌のあたたかさがとても心地よい。
幸せとはこのことだったか、といった感触だ。

「動かしますね……っ。」
伊吹が胸を上下に動かし始める。
すべすべした柔肌による摩擦は
思わず腰が持ち上がるくらい気持ちがいい
ぱっ
ぱっ
ズリッ
ズリッ

それにしてもやはり今回の伊吹はかなりノリ気に見える。
このまま仕込み続ければもしかしたらやりたい放題に……。
以前なら思いつきもしなかったが、
どうせなら伊吹にも行為を楽しんでほしいと感じている。
お互いに気持ちよくなり、
その喜びを分かち合いたい。
ズリッ
ズリッ

「ふふ、主殿の我慢してる顔、とても素敵です。」
考え事をしていて難しそうな表情になっていたらしい、伊吹がちょっとした勘違いをする…が、思い出したかのように急速に快感が込み上げてきた。
「ああ……、だがそろそろ出そうだ。このまま頼むぞ。」
「はいっ、伊吹にお任せくださいっ。」
返事とともに摩擦の勢いが強くなるが、我慢汁が出ているのもあってかなり心地よい感触だ。
程よい快感が継続的に与えられ、いよいよ射精感がこみ上げてくる。
ぱっ
ぱっ
ズリッ
ズリッ

『あっ……。』
伊吹の身につけているインナーを突き抜けて精液が飛ぶ。
障害物がなかったらどれだけ勢いが良かったことか。
伊吹はその様子を驚きながらも嬉しそうに見ている。
びゅく
びゅるる
びゅーん

「わぁ……、すごいですね……♪」
にじんだ精液と私の満足げな表情をみて誇るように喜ぶ伊吹。
精液でぬるぬるになった胸の中はとてつもなく気持ち良い。
まんこに入れている時とはまた違った良さがある。
ズロッ…

「ふふ、主殿、まだまだ物足りないという感じでございますね。」
見透かしたような言葉をかけられる。
まあ最も、その通りなのだが。
「寝室へ参りましょうか、
こちらですと万が一の時に人目につきますし…。」
場所を移動しようとする伊吹。
しかし私はそれを許さなかった。
ズロッ…

「あっ、主殿……これは……っ。」
その場を離れようとしていた伊吹をがしっと掴まえる。
そしてそのまま後からちんぽをぶち込んだ。
伊吹は少し困ったような表情をしたが、
抵抗せずそのまま受け入れてくれた。
「もう……、見つかっても知りませんよ。」
「その時はその時だ。」
私はそう言うとそのまま腰を動かし始める。

おっぱいの感触もよかったが、
やはりこのまんこは別格だ。
ちんぽを包み込む何とも言えぬ快感、
それをより強く感じたくて
知らず知らずのうちに動きが強くなる。
突くたびに揺れる尻と胸は視覚的にも刺激的だった。
ばちゅっ♡
じゅぷっ♡
ビクッ♡
ぱちっ♡
んっ♡
ゆさっ

伊吹の身体をこれでもかというくらい堪能する。
腕を掴みながらの行為はまさに犯しているという感じで、背徳感をもたらし、支配欲を満たしてくれた。
「んっ……ふぁ……んんっ。」
抑えるような伊吹の声が更なる刺激をもたらす。
どうやらこれ以上は持ちそうにない。
「伊吹、いくぞ……っ。」
じゅぷっ♥
ばちゅっ♥
ビクッ♥
ゆさっ
ん♥
はっ♥

思いっきり奥まで突っ込むと、
そのまま勢いよく射精した。
「あっ……すごいっ、熱いのきてますっ。」
逃がさないように腕ごと身体を引っ張り、
腰を振りたくりながら奥へ奥へと精液を流し込む。
ものすごい達成感と気持ちよさが体中を満たす。
ぴゅく
ぴゅるっ
ビクッ
ビクッ
はぁ
はぁ

「はぁ…はぁ…っ、激しくて壊されちゃうかと思いました……。」
「きつかったか？すまなかったな……。」
確かに昨晩以上に力の加減ができていなかったかもしれない。
快感を求めるあまりより激しくしてしまったように思う。
「いえ……、伊吹は大丈夫ですっ。」
健気な言葉を返してくる伊吹、
その声色が艶っぽくなっている気がするのは気のせいだろうか？
ビクッ…
はぁ～
はぁ～♥

そんなことを考えていると、再びちんぽが硬さを取り戻す。
出したばかりだというのに我ながら困った愚息だ。
「あっ……また……。」
「すまない伊吹、もう一度良いか？」
「はいっ、伊吹でよろしければ何卒お使いください。」
この後、執務中だというのに結局数えきれないくらい
身体を重ねてしまった。
やれやれ、残業確定だな……。
はぁ～
はぁ～♥
ビクッ…♥

翌朝、まだ日が昇り切らない頃。

下半身のあたりに違和感を感じ、何だろうと目を覚ましてみると全裸になった伊吹が寝床に潜り込んでちんぽを弄んでいた。

まだ寝ぼけ眼であったが、ここにきて私は確信をした。

伊吹はあきらかにえっちすることにハマっている。

女として求められることの悦び、性の快感……。

思いつくような要素は多いが、あの夜の少しの好奇心から随分と深いところまでハマりこんでいることは間違いない。

私は胸の奥から湧き上がるような興奮感を覚えていた。

日常において常に上品に振舞っていた彼女が、ついには自ら私の身体を求めてきたのだ。

「主殿、おはようございます……。
ふふ、驚きましたか？殿方が喜ぶこと、伊吹も学んでいるんですよ？」
ちんぽを嬉しそうにさすりながら伊吹が股から顔を出す。
「ああ、伊吹がこんなにえっちな子になるなんて驚いたぞ。」
「もう……、主殿のせいですよ。
お慕いしている方からあのように求められたら誰だって……。」
恨めしそうな言葉とは裏腹に、声色は弾んでいてどこか嬉しそうだ。
すり♥
すり♥

こちらに視線を向けながらちんぽを舐め始める伊吹。
先端から裏筋までゆっくりと舌先で舐めていき、
そこから舌全体を使ってちんぽを包み込むように舐め上げる。
丁寧で献身的で、それでいてものすごく官能的なその様子に、
私は朝立ちしていたちんぽを更に硬くしていった。

「ふぅ……、随分うまくなったものだな、伊吹。」
すぐに射精してしまわないよう息を整えながら伊吹のフェラに賛辞を贈る。

「ふふ、お褒めいただき光栄です。
もっとよくして差し上げます……、伊吹にお任せください。」

意気込んだ伊吹は少し息を荒くしながら
より激しくちんぽへの奉仕を続ける。
吐息や鼻息が唾液と我慢汁にまみれた先端にくすぐるようにあたり、
思わず腰が動いてしまいそうになる。
真面目で勤勉な子がえっちにハマるとこうなるのか……と感動してしまう。
舐めまわされているちんぽから継続的に送られてくる快感。
それが蓄積されるように高まり、いよいよ射精しそうになってくる。
「くぅ……伊吹、そろそろ出そうだ……。」
変に我慢していたために変なうめき声をあげてしまう。
その様子を見ていた伊吹は気をよくしたのかますます動きを激しくした。

「うっ、出るぞっ！」
ついには堪え切れなくなり、勢いよく射精してしまう。
びくびく震えるちんぽから発射された精液は
伊吹の顔全体を勢いよく汚していく。
びゅく～♡
びゅる～♡
ぶびゅ～～♡

射精後の敏感になっているちんぽの先端が、
伊吹の舌先につつかれるように舐められる。
貪欲ともいえる伊吹の奉仕への姿勢もあり、ちんぽは更に硬さを増す。
例えイったとしても終わりではない、
初めての日に伊吹の身体に自ら叩き込んだことだ。
くちゅ♥
ドロッ…
ちゅう♥
ちゅるっ♥

「いっぱい出ましたね……、なんだか嬉しくてドキドキ……。」
「ああ……、すごく気持ちよかったぞ伊吹。こんな早くからありがとう。」
「そんな…お気になさらず。愛する主殿のためなら当然のことです。」
興奮がそうさせているのか、さらりと愛していると告げられた。
事前にえっちが愛する者同士の行為として認識があったのかもしれない。

こちらとしても否定するまでもない、
私はここまでしてくれる伊吹を愛しているだろう。
「主殿……、まだ終わりではございません、
そのまま楽になさっていてください。」
次に伊吹が何をしてくれるのか、私の意識はもうすでにそこに向いていた。

「それでは参りますっ。」
伊吹は私を押し倒し、そのまま馬乗りになった。
「ほら…胸も触ってくださいっ。」
手を掴まれおっぱいまで誘導される。
信じられないほど柔らかく、そして気持ちがいい。
今回の主導権はもはや完全に伊吹にあった。
しかしそんなことは些細なことである。
私は両手に伝わるおっぱいの感触と、
腰にのしかかる心地よい伊吹の重みを堪能していた。
私と伊吹との繋ぎ目にはすでに液体が溢れており、
お互いに興奮していることが分かる。

「ふふ、主殿の気持ちよさそうなお顔……、とてもかわいらしいです。」
「そうか……、なんだか少し照れるな。」
言った通り多少の照れくささはあったが、こうやって奉仕に身を任せるのも悪くない。
「最高の気分だぞ伊吹、もちろんこれで終わりではないだろう？」
「はい、この伊吹、必ずや主殿のご期待に添えて見せますっ。」
軽く挑発してみるが、心強い返事が返ってくる。この場においても伊吹は成果を出す努力家なのだろう。
腰がぐりぐりと弧を描くように動かされ、まるでちんぽが搾り取られるような感覚に陥る。
はっ
むにゅ
はっ
むにゅ
ちゅぱっ
ぐちゅっ

「くっ……なんて締め付けだ……。」
日ごろから鍛錬等で下半身が鍛えられているためか、伊吹のまんこは腰の動きとともに強烈なまでに快感を与えてくる。
「我慢なんてしなくていいですからね……。いつでも伊吹の中に出してくださいっ。」
そう言うと伊吹の腰遣いがより激しくなる。
「うあ……、も、もうダメだ、出すぞ伊吹！」
自分のペースではないからだろうか、思わず情けない声が出てしまう。
それは限界寸前のぎりぎりの状態で、なんとかふり絞ってだした声であった。

吸い上げられるように精液が勢いよく溢れ出す。
上向きになっているためか、これまで以上に
精液がせり上がってくる感覚があり、
まさに搾り取られているような感触がある。
胸を掴んでいる手にも
思わず力が入ってしまう。
柔らかさと裏腹に存在する
強い弾力が力を込めたはずの指を押し返す。

「うふふ、たくさん出ちゃいましたね……。」
目を細め、柔らかな表情になった伊吹が
私を見下ろしながら満足げに言う。
もはや完全に彼女のペースだ。
しかし、いくらペースを握られていようが、
伊吹の身体が魅力的なのに変わりはない。
私はこんな状況においても未だ興奮が冷めず、
射精したばかりのちんぽを再び硬く勃起させた。

「あっ、また硬く……。
まだできそうですね、主殿？」
すっかりえっちに貪欲になってしまった伊吹。
しかし私はこのいやらしい姿を心のどこかで
望んでいたような気がしてくる。
「ああ、もちろんだ。せっかく伊吹がこれだけ
やる気をだしてくれているんだ。私は嬉しいぞ。」
「伊吹も嬉しいです……。
こうやって主殿と通じ合えるのが夢のようです。」
ぶーん
ぶーん
ぶーん
ぶーん

伊吹が再び腰を動かし始める。
溢れた精液がなんともいやらしい水音をだしていた。
まだ朝の目覚めたてだということを
忘れかけているくらいお互い行為に没頭している。
もっと伊吹を味わいたいという気持ちが強く、
冷静になる余裕は全くないのだ。
ぱっ
ぱっ
ぐちゅ
ぐちゅ

二度の射精で敏感になっていたからか、
想像よりも早くに射精してしまう。
伊吹は余裕のある表情のまま、
私を見下ろした。
「もう何度もしているのにこんなに……。
伊吹、感激しております。」
大量に溢れ出る精液を眺めながら、
伊吹は満足そうであった。

「なんだかすごいことになっておりますね。」
伊吹の言う通り、繋がっているところを中心にちょっとした洪水のように液体が溢れていた。
「あ、ああ……そうだな。これだけしたんだ、さすがにもう満足したぞ。」
「ふふ、ダメです。伊吹が満足しておりません。」
伊吹は私の腕に添えていた手に力を込めた。
「なっ……。」
「それでは……伊吹、参りますっ。」
どうやら今日はまともに仕事ができそうにない。
どこか悪魔的な伊吹の笑みをみて私はそう思うのだった。

別日。

伊吹へ調子に乗ったことへの仕置きと称して、
まだ日が沈まぬ内からの奉仕を命じた。

もはやここまでくると罰になっているかは全くもって怪しい。

伊吹も歓喜の情を隠さなくなっていた。

彼女はすっかりこういったことをするのに慣れてしまっている。

手を出す前には清楚に思えていた伊吹であったが、
あらゆることに一生懸命で、それを素直に覚えていく性格は
性行為にまで凄まじい影響を与えているのだろう。

私にとってこれはとても喜ばしいことだった。
その理由は彼女を秘書に置いていたことを思えば分るだろう。

胸をわしづかみにし、背後から覆いかぶさるように伊吹に抱きつく。
既にガチガチに勃起していたちんぽは愛液で溢れていたまんこに吸い込まれるようにして挿入されていった。
「あんっ、主殿、今日も逞しくて素敵ですっ。」
男を喜ばせる言葉遣いまで覚えている。
伊吹はどこまで出来た女になっていくのだろうか。
はっ♥
はっ♥
ズプッ♥
「伊吹が魅力的だから私も我慢できなくなってしまったのだぞ。」
「そんな……、もったいないお言葉です。」

日があるうちにカーテンを開けた室内で、互いに裸になった状態での行為。
誰かに見られたら言い訳はできないだろうなと思った。
胸を気分よく揉みながら腰をぶつけまくる、
上に乗られるのも悪くはなかったが、やはり男としてはこういった
支配欲をみたしてくれる体勢のほうが気分がいい。
顔の位置が近いせいか、伊吹の息遣いもこれまでで一番よく聞こえた。
伊吹の荒い息を感じ、お互いに興奮している実感がわいてくる。
私は予想外なほどにこのことに気をよくしてしまった。
伊吹も気持ちよくなってくれている、あるいは喜んでいる、
そのことがとても嬉しい。

「この体勢、主殿の呼吸が聞こえて……、なんだかドキドキ……。」
「私もちょうど同じことを考えていたよ、伊吹も興奮しているんだなって。」
「嬉しいです、お互いに通じ合っているようで……、んっ。」
話をする間も片時も動きは止めない。
柔らかな胸を思う存分揉みしだき、
お互いの汁で熱く濡れたまんこを突きまくった。
気持ちよさに身を任せて動いていると徐々に射精感がわいてくる。
「伊吹、そろそろ出すぞ！」

大量の精液が射精され、注ぐそばからまんこから溢れ出る。
射精をしている間も腰の動きは止めず、より多くの精液を吐き出そうとした。
「んんぅ…っ、主殿の熱いのがすごい勢いで……っ。」
びくっ
びくっ
びゅーっ
どぷっ
びくんっ

溢れ出る精液はぽたぽたと滴り床を汚した。
「ふふ、こんなに溢れちゃって……、
あとでお掃除する方に申し訳ないですね。」
こんな時にも他人の心配をする、優しくまじめな伊吹らしい。
まだ続きをするのであれば彼女のためにも
寝室へ移動したほうがいいだろう。
はー♡
はーっ♡
どろぉ♡

「このままするのもいいが……、寝室へ移動しないか。
立ちっぱなしも疲れるだろうしな。」
伊吹に移動を提案する、これはもちろん続きがしたいという意思表示だ。
「ふふ、今日はお仕事できそうにないですね。」
思えばこの関係になってから今まで取れなかった休暇を、
自然と……というには何だが、取れるようになっている気がした。
はーっ♡
はーっ♡
どろぉ♡
もしかして伊吹はここまで計算していたのだろうか？
そう考えていると愛おしさが狂おしいほどに込み上げてくる。
「愛しているぞ、伊吹。」
「伊吹もでございます……♡主殿。」

伊吹を寝室へ連れ込むと雪崩れ込むように押し倒す。
流れのまま遠慮もせずに胸に手をまわし、ちんぽをぶち込む。
伊吹の下になるように回った腕に
心地よい柔らかさと重量感が乗ってくる。
伊吹の抱き心地は最高だった。
「いくぞ伊吹。」
「はいっ、いつでも…準備はできております。」
ズプッ♥
きゅっ♥

「ああ、このように求めていただけて……、伊吹は感無量でございます……。」
がっつくように伊吹を抱く私を見て彼女はそう言った。
「こんなに尽くしてくれる子がいるんだ、自然とこうなってしまうさ。」
「嬉しいです、もっと…もっとしてください。」
伊吹の蕩けるような表情が肩越しに見える。
なんといやらしい表情をするのだろう、私の高揚感は最高潮に達しようとしていた。
はっ♥
はっ♥
もにゅっ♥
ヌチュ♥
グチュ♥

「伊吹すまない、あまり長くはもちそうにない。」
「大丈夫ですっ、いつでもいくらでも……、伊吹に主殿の全てをぶつけてください……っ。」
快楽に溺れたとしても私のことを常に想い続けてくれているのは伊吹のすごいところだ。
ここまでできた子にこんなにも想われているなんて、私は何と幸せ者だろうか。
その幸せをかみしめながら、射精に向けより激しく腰を叩きつけまくる。
はっ♥
はっ♥
もにゅっ♥
ヌチュ♥
グチュ♥

胸を強く揉みしだき、身体を押し付けるようにしながら
思いっきり奥の方へと精液を吐き出した。
触れている伊吹の身体からは
ビクビクッ、と跳ねあがるような感触があった。
伊吹も感じてくれているのであろう。
そのことに気分を良くした私は
最後の一滴まで搾り取ろうと、さらに強く身体を押し付けた。
ふぅ～♥
ふぅ～♥
ぎゅ～♥
びゅっ♥
びゅくっ♥
ぶびゅっ♥

「ああ……っ、今回もこんなに……、伊吹感激です。」
混ざり合った液体はもはやどちらのものであるか分からない。
伊吹は恍惚とした表情をしている。
こうやって精液を浴びることに悦びを感じているのだろう。
ここまで仕上がった伊吹についてひとつ考えていることがあった。
それはある種男のロマンとも呼べるものである。
「……なあ伊吹、ひとつ頼みがあるんだが。」
「主殿……、伊吹にできることなら何でも致します。
なんなりとご命令ください。」
はーっ♥
はーっ♥
ぺロッ♥

「んっ……ちゅる…っ、あむっ……。」
射精したてで様々な汁で汚れたちんぽをしゃぶる伊吹。
私が彼女に命じたのはお掃除フェラだった。
出したての精液をまんこからドロドロに垂れ流しながら奉仕する様子は
視覚的にも精神的にも満足度がかなり高い。
「伊吹はいい女だな……。」
「ん……っ♪んちゅぅ……んっ……んむっ」
褒めてやると嬉しそうにしてちんぽをしゃぶる伊吹。
お掃除フェラとはいうものの、私はまた興奮し始めている。
その証拠に、ちんぽが再び硬さを取り戻し始めた。
ちゅ～んちゅ～
ドロッ…

再び硬くなりはじめたちんぽに気付いたのか、
伊吹が愛おしそうに先端部分を舐めまわし始める。
射精直後で敏感になっていたため、
思わず腰が浮いてしまうほどの刺激をもたらした。
そしてその反応に気をよくした伊吹は更にちんぽを攻め立てた。
このままではまた射精してしまうのも時間の問題だろう。
ちゅる♡じゅる♡
ドクッ…

「このままだとまた射精してしまいそうだ。
せっかく頑張って綺麗にしてくれたのに良いのか？」
「んちゅる……むちゅっ……ちゅるるっ。」
伊吹は返事の代わりにちんぽを舐めまわす舌使いを激しくした。
ちゅる♡じゅる♡
ムロッ…
私はこうなることになんとなく感づいていた。
今の伊吹は性愛に目覚めている、
私の喜ぶことを期待通りにこなすだろう。
そしてそのこと自体が伊吹にとって一番のことなのだ。
「くっ……、また出そうだ……っ！」
「んっんっ…んじゅっ…ちゅるる…っ…んんっ。」
私の呻きを聞き、伊吹はより絡めている舌の速度を早めた。

びゅく♡
びゅる♡
ぶびゅ〜♡
ビクッ
ドロッ…

飛び出した精液は伊吹の顔を覆うように汚した。
それを受けてもなお彼女はちんぽに奉仕を続けている。
「伊吹……、君は本当にえっちになったな……。」
ちんぽをしゃぶり続ける伊吹を眺めながらしみじみと感じる。
「んっ……、こんな伊吹はお嫌いですか……？」
「まさか……、秘書に君を置いていて正解だったよ。」
「ああ、伊吹は幸せ者です……。
主殿と気持ちを共にできる時間がとても幸せです……。」
伊吹にとって私とのえっちがとても大切なものになっている事が分かる。
私に尽くすこと、それが成功している実感、そして自らに与えられる快楽。
こうやってえっちなことをするのは、精神的にも肉体的にも伊吹にとって
『やると嬉しいこと』になっているに違いない。
ちゅ
ちゅ
ペロォ
ドロッ…

短期間ですっかり性に染まった伊吹。
清楚で可憐で、身近にいながら高嶺の華のような存在であった彼女から
ここまでのいやらしさを引き出せたことを嬉しく思う。
「伊吹。」
「……？」
私の呼びかけに反応し、奉仕を続けながら見上げてくる伊吹。
「これからもよろしく頼む。」
この関係がいつまでも続けばいい、私はそう思っていた。
伊吹はどうだろうか……？と思うも、
その返事は非常に今の彼女らしい形で返ってきた。
「んっ……♪ んちゅぅぅ♪」
内側に溜まっている精液を吸い出すようにする伊吹。
これからも彼女とはいい関係を続けていけそうだ。
ちゅ♪
ちゅ♪
ドロッ…